

埼玉特殊アクセントの崩壊過程

吉田 健二

(キーワード：埼玉県東部方言，特殊アクセント，アクセントの崩壊)

【要旨】

埼玉県東部地域に分布する「(埼玉)特殊アクセント」について実施した高年層調査⁽¹⁾の結果を示し、その2拍名詞アクセントの各変種の地理的分布に反映した、過去に進行中であったと考えられる埼玉特殊アクセントの成立～崩壊の過程を考察する。

金田一春彦(1948)の発見以降、当地域のアクセントについて①曖昧化(無アクセント化)する、②共通語化(多型化)する⁽²⁾という異種の変化が報告されている。また、①、②と関連して、この特殊アクセントの成立について、③東京式アクセントから変化したもの、④無アクセントが型の区別を獲得しつつあるもの⁽²⁾、という相反する説が提出されている。他地域との比較によって、前者が支持されることも明らかにしたい。

0. はじめに

埼玉特殊アクセント地域は、概略利根川を境にして栃木・茨城・千葉県の無アクセント地域と接している。全国各地の特殊アクセント・曖昧アクセントの特徴の一つとして、しばしば「無アクセント地域に隣接している」ことが挙げられ、無アクセントへ向かうアクセント崩壊過程の中間段階として位置づけられる(平山輝男1973等)。これに対し山口幸洋(1991)は、曖昧アクセントにみられる「型らしきもの」を失われつつある型の区別であると見るのは、そのような予見を持ってデータを採り解釈するからであるとし、むしろその逆に「一型」話者が共通語アクセント習得の過程で「あいまいアクセント」化するのだと考える。したがって山口氏の立場では、「時に型らしき反応をしても、それはそのぶんその話者が無意識に共通語化が進行しているのだと見る(p.85)」ことになる。

従来無アクセントとされてきた地域が、殊に若年層において現在急速に共通語アクセント化しつつあることに疑いはなく、報告も多い⁽⁴⁾。山口幸洋(1991)は、これを「これまでの一型アクセントに関する説明とは逆の事態(p.80)」とする。しかし、その「型らしき反応」が共通語化の場合に見られるものとは異質と考えられる場合、真の意味でこれまでの説明と「逆」なのではなく、《方向としては逆であるが、事態としては異質》な変化だと見るべきである。まず、この点に関して考察する。

1. 埼玉東部アクセントの現状の概観(2拍同音異義名詞比較発音調査)

比較発音調査の結果を【表1】に示す⁶⁾。大橋勝男(1984, 調査は1970~1973年)のもの比べて、全体的に比較発音の出来が悪くなっている。どの語でも●○型がかなりの割合を占めるのは無アクセント化傾向の反映と解釈できる。秋永一枝・他(1971)によれば、この地域においては異音語よりも同音語の方が先に型の区別が失われる傾向にあるとのことで、大橋勝男(1984)と調査年でおよそ20年、話者の平均生年で15年後になることも考え合わせれば、納得できる結果である。しかしその中で比較的安定しているのが、2拍名詞IV V類の○●~○●▽型である(▽▼は助詞)⁶⁾。同音語では型の混乱があるため、I~III類よりもIV V類の方が○●型が多くなるという程度だが、「胸」対「汗」では、曖昧化のかなり進行した地域を含めて算出したにもかかわらず「汗」の○●型が高率を示す。埼玉特殊アクセント地域は2拍名詞ではI~III類の方が変化しやすく、その結果、比較的安定したIV V類と衝突して、区別が曖昧になってゆくというものらしい⁷⁾。隣接する茨城・千葉県無アクセント地域の2拍単位の音調は●○、3拍単位は○●○が典型であった⁸⁾。この音調へ向けて曖昧化~無アクセント化してゆくものと思われる。

【表1】 比較発音結果：各音調出現比(%)／無アクセント・東京式地域を除き算出。

音 調	釜 I	鎌 IV	飴 I	雨 V	橋 II	箸 IV	雲 III	蜘蛛 V	胸 II	汗 V
○● (○●)	12.5	28.8	56.3	63.8	38.8	58.8	8.8	27.5	8.8	82.5
●○ (●○)	65.0	51.3	32.5	25.0	43.8	23.8	72.5	46.3	73.8	10.0
●●・○○	22.5	20.0	11.3	10.0	16.3	16.3	18.8	56.3	17.5	7.5

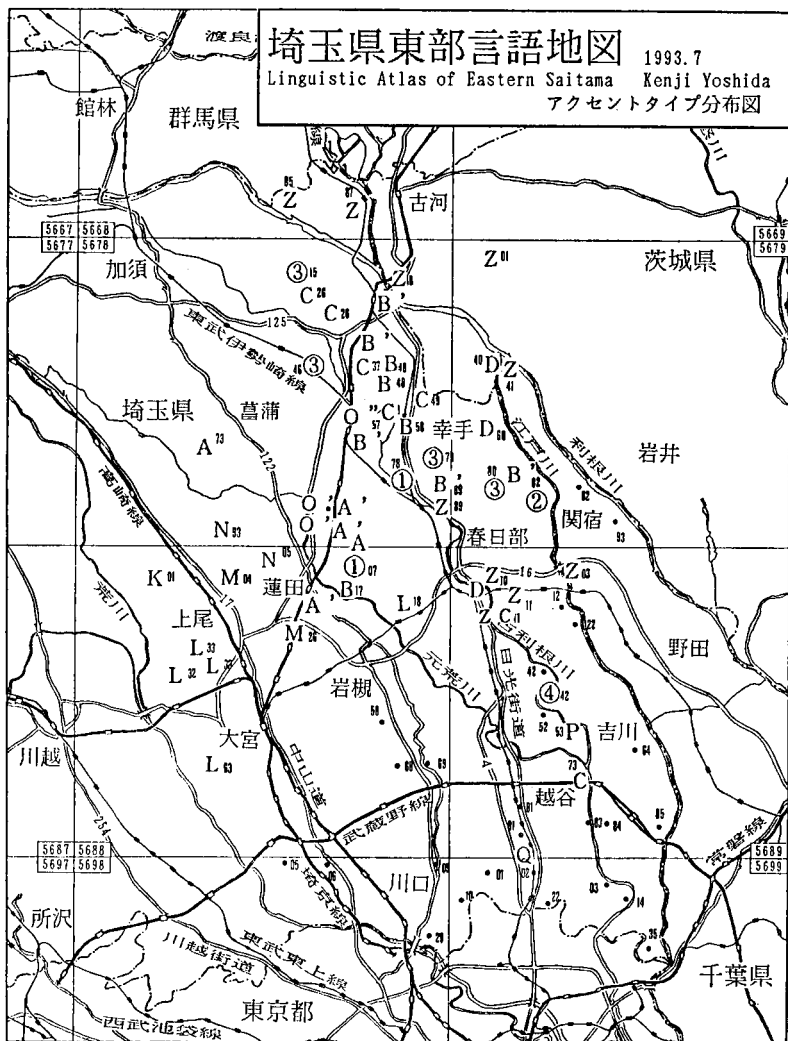
2. 無アクセント地域の共通語アクセント化と埼玉特殊アクセントの違い

篠木れい子・佐藤和之(1992)によれば、無アクセント地域の話者には単独・助詞付きともに頭高の語の方が認識され易く、共通語化も最も早い。東京式に接するその他の無アクセント地域でも同様の結果が見られる(注4の文献参照)。2拍名詞についていえばIV V類から共通語化が始まると見られるわけである。埼玉式が無アクセントの共通語化しつつある姿であるとすれば、この類の語がいちばん初めに変化を起こさなければいけない。しかし、1節の通り高年層ではこのIV V類が最も安定して共通語アクセントとは違った音調(○●~○●▽)を示すのである。

当域でももちろん共通語アクセント化は起きている。しかし、それは若年層において特に顕著なのであって、生え抜きの高年層における現象とは異質と見るべきものと思われる⁹⁾。埼玉特殊アクセント(特にそのうちの型の区別が曖昧なもの)が、接触により共通語アクセントを獲得したものであるならば、高年層と若年層のアクセント変化の現象が連続的に(せいぜいテレビ等の影響で加速されただけというように)説明されなくてはならないはずである。山口幸洋(1991)も無アクセント地域の共通語アクセント獲得を「昭和30年代以降」の現象としている。しかし埼玉特殊アクセントは金田一氏が調査をした昭和10年代に既に一定の分布域を持って存在していたし、そのときの話者(尋常小学校6年生が中心)よりもっと前の大正・明治(大橋勝男1984等や本稿の話者の言語形成期)にも存在したのである。以上のことから、埼玉特殊アクセントは無アクセントの共通語化とは異質のものとして説明されるべきだと考える⁹⁾。

3. 埼玉県東北部2拍名詞アクセントの変化パターン

埼玉特殊アクセントの中で最も整った体系が昭和12年の蓮田町（金田一春彦1948）のものである。上野善道（1977, 1984）によれば、東京式と完全に対称な体系（ $n+1$ 型、東京式と同じ位置に上げ核/○/、句音調 {「○○」○（…）}）と解釈できる。この蓮田町



【地図1】

アクセントの2拍名詞の音調体系を《type O (Original type)》として、この type O から出発して曖昧～無アクセント化へと向かうタイプ《type A～C》を大野真男(1984)のデータによって加えて、整理すると【表2】のようになる。

【表2】 埼玉県東北部2拍名詞アクセントの変化

タイプ 調査年・調査者 地 点	type O 1937・金田一春彦 蓮田町	type A 1978, 1979・大野真男 蓮田市	type B 大野真男 菖蒲町・加須市	type C
I 類	●○～●●▽ / ○○▽ /	●○～●●▽		
II・III類	●○～●●◎▽ / ○○▽ /	●○～○○▽	●○～●●○▽	
IV・V類	○●～○●▽ / ○○▽ /			

※蓮田町アクセントの音韻論的解釈は上野善道(1977; p.294～296)による。

これに本稿の高年層調査のデータを加え、埼玉特殊アクセントの誕生及び変遷の仮説モデル【表3】を作った。I II III IV は2拍名詞の類別。:の右の地名はそのタイプが得られた地点の例。() 付きの地名は金田一・大野氏の報告によるもの。

これらのアクセントタイプの地理的分布を【地図1】に示す。荒川沿いの大宮市・上尾市から県東北部、そして隣接する他県へかけての地理的分布上に、東京式から埼玉式が生まれ、《type L～N》、更に変化を続けて曖昧化し、無アクセント《type Z》へと移るようす《type A～D, および type ①～④》が捉えられる⁴⁾。以下いくつかの地域の2拍名詞の音調を示し、アクセント変化の具体的な様相を見て行くことにする。

4. 埼玉県大宮市・上尾市～伊奈町の2拍名詞アクセント《K～N》

4.1 東京式に非常に近いもの《type L》: 上尾市堤崎/明38・男(5688.33左上)

I ○●～○●▽

II III ○●～○●▽

IV V ●○～○●▽ or ●●◎▽ (箸, 雨, 汗)

※◎, ▽は高中低の「中」, 調査語彙は6.1. 節を参照。実際は語単独・助詞付き文節・短文の3種類を調査。～の右は助詞付き文節と短文の両方を勘案して表示した(短文を重視)。ゆれがある場合その型の語を()に入れて示す。その他の語彙は()の付いていない型に属す。/の右は生年・性・地点番号。

I～III類は完全な東京式。IV V類のみに●○▽ or ●●◎▽というゆれがみえる。大宮市中釘(大6・男5688.32), 大宮市内野本郷(大9・男5688.33右下)も同様で、やはりIV V類の1, 2語にのみ●●◎▽が現れた。金田一(1948, p.67～68)によれば、忍町(現在行田市)・鴻巣町・平方町(現在上尾市, 堤崎のある大崎村の西隣り)・川口市などにも見られる⁴⁾。このIV V類に見られる頂点の後ろの拍への移動が、東京式～埼玉式へ移行する最初期段階での変化なのであろう。ここから東に中仙道を越えた上尾市平塚(大11・男5688.04)は、もうはっきりと埼玉式というべきもので(4.2節参照), 現在70歳代辺りの

高年層に関しては上尾市・大宮市の荒川よりが埼玉式の最西端と言えそうだ。

4.2 type O の前段階《type N》：北足立郡伊奈町小室／大6・男 (5688.05)

I ●○～○●▽

II III ●○ or ●● (夏, 花) ～○●▽ or ○○▽ (米)

IV V ○● or ●● (鎌, 松) ～○●▽ or ●○▽ (船, 箸)

3.2. 節の type A' とも似ており, type O よりも後の段階である可能性も否定できないが, IV V類において, ●○▽>○●▽の変化を示すゆれが窺える⁴⁾ので, この後 type O に変化してゆくタイプであると考えておく。II III類の核のある位置が低くなる変化(○●▽>○●▽)が始まっており, 上記のIV V類の変化と平行して語頭の隆起が始まっていると見られる(比較発音ではII III類の5語中4語が○●型であった)。さらに, これと類似の体系が上尾市瓦葺(大1・男5688.25)に見られる。II III類が○● or ●●～○● or ○●▽で, 伊奈町の type N より一段階前(type M)である。上尾市平塚(大11・男5688.04)もこのタイプと思われるが, II III類の語単独の場合○●型が多く聞かれた。○●>○●の変化の途中で現れるゆれであると思われる。

5. 蓮田市～埼玉県東端地域の2拍名詞のアクセント《type O～Z》

5.1 type O の類似型《type O'》：南埼玉郡白岡町白岡／明32・男 (5678.96左下)

I ●○ (釜, 蜂) or ●● (飴, 水) ～○●▽ (飴, 蜂) or ●●▽ (釜)

II III ●○ or ○○ (米, 橋) ～●●▽ (夏, 花) or ○●▽ (旗)
or ○○▽

IV V ●○ (松, 汗, 春) or ●● (船, 帯) or ○●～●●▽ (船) or ○●▽

I類の●●▽～○●▽, II・III類の○●▽～○○▽の変化が完了すれば type A になる。この変化は, 句音調の {○○○(…)}>{○(…)} という変化と解される。I類はゆれが大きい, 比較発音調査では○●～●●▽が2/3だったため本来の型と判断した。type O から type A へ変化する過程で, 型が不安定になりつつあるものと思われる。音調型のゆれがかなり激しい。助詞付きの場合の I/IV V類の区別が消失しつつある。

5.2 type A の類似型《type A'》：蓮田市蓮田／大2・男 (5688.16)

I ●○～○●▽ (釜, 蜂) or ●●▽ (飴, 水)

II III ●○ or ○● (橋, 靴) ～○●▽

IV V ○●～○●▽ ※「靴」は1拍目の母音の無声化による

II III類の○●▽という音調は, この話者の4拍名詞のウグイス(鶯), アサガオ(朝顔)に見られた○●○という音調と同じ性質の変化を経たものである。すなわち, ●○▽型や●●▽型の「高」にはさまれた核の位置の「中」が「高」に変化し, ●●▽型, ●●●▽型となったが, 同時に type O' で見られた句音調の変化がこの話者では完了し, 最初の拍が低く発音されるようになったのである。近隣の白岡町などにこのタイプが見られる。

5.3 type B の前段階型《type O'》：久喜市青毛／明36・男 (5678.57)

I ●○～●●▽ (釜, 飴) or ○●▽ (蜂, 水)

II III ●○～○●▽

IVV ○●~○●▽

I類は半分が●●▽型で、type O のままである。また、IIⅢ類が●○▽型になったことにより、上り核/○」/では解釈できなくなる。この点で type A と本質的に異なる。従って、type A からの変化型ではない（【表3】を参照）。助詞付き文節におけるI/IVVの区別が消失しつつあることは type A と同様。さらに、IIⅢ類の音調が、単独と助詞

【表3】埼玉特殊アクセントの成立・崩壊パターンモデル

< I / IIⅢ / IVV >

【第3次アクセント】

K 東京式：上尾市藤波

↓

【IVVの●○▽化】

L 東京式に非常に近いもの：上尾市堤崎

↓

M：上尾市瓦葺

↓

N 典型的埼玉式の前段階

：伊奈町小室

↓

< 県東南部 >

(O) 典型的な埼玉式 ----- ? ----- P Oに近い

(：1937 蓮田町)

：越谷市増森

↓

O' Oに近い

Q：草加市旭町

：白岡町白岡

↓

《昇り核での解釈不可能に》

O" Bの前段階

：久喜市青毛

《句音調〔○●…〕に変化》

A'：蓮田市蓮田

↓

B：幸手市南、千塚

< I IVV / IIⅢ >

(A) (：1979 蓮田市)

(：1979 菖蒲町・加須市)

【第4次アクセント】

①：杉戸町下高野

↓

B'：杉戸町倉松、久喜市吉羽

《語単独が全類○●に》

②：庄和町西宝珠花

↓

< I IIⅢ / IVV >

【第4次アクセント】

C：大根根町出生、幸手市北

《語単独が全類●○に》

【第4次アクセント】

↓

D いわゆる曖昧アクセント

< I IVV / IIⅢ >

< I IVV / IIⅢ >

：茨城県五霞村小福田

③：鷲宮町鷲宮

④：松伏町松伏

Z 無アクセント

：北川辺町、千葉県関宿町

付きで同じになり、I / II III / IV V型のままながら、全体的にみれば音調の単純化が進んでいる。type Bと見られる地点はこの久喜市のすぐ東、あるいは北に分布する。

5.4 type B/C の中間型《type B'》：北葛飾郡杉戸町庫松 / 大3・男 (5678.89上)

I ●○～○●▽

II III ●○～●○▽ (旗, 胸, 花) or ○●▽ (橋, 夏, 米, 足, 靴)

IV V ○●～○●▽

II IIIがIに合流して、I II III / IV Vの二型 (type C) になる寸前の状態であると思われる。type Bを介しての変化型と考えられることは、大野 (1984) の加須市と同じである。type Cへの変化が完了すれば、助詞付き3拍文節の音調が○●▽型に統一されることとなり、より一型に近づく。このtype B'およびtype Bに近いものは近接する比較的多くの地点で見られた。type Cと見られる地点は、この杉戸町のさらに東や北に位置する。さらに、IV V類に○●～○●▽が多いという以外、はっきりと傾向がない地点がある。無アクセント化の寸前まで来ており、型の区別が非常に曖昧になっているのだと思われる。(type D)。茨城県五霞村小福田 (明40・男5679.40)、幸手市下吉羽 (大10・男5679.60) がそれで、位置的にも、無アクセント地域との境界である。

5.5 type O から別の方向に合流を起こしたもの《type ①～④》

前節のtype C, DのI II III / IV Vという合流に対して、I IV V / II IIIという合流を起こしている、別のルートで曖昧化～無アクセント化に向かうタイプがある。まず北葛飾郡杉戸町下高野 (明40・男5678.78) のものを挙げる (type ①)。

II III ●○ (旗, 胸, 花, 米) or ○● (橋, 夏, 足, 靴) ～●○▽

I IV V ○● (釜, 鎌, 雨, 汗, 帯) or ○● (飴, 水, 船, 松, 春) ～○●▽
(●● (蜂, 箸))

下降拍は2拍目の母音との関係で現れるものか。これを音声レベルの変種と考えて抽象化すると、II III ●○～●○▽ / I IV V ○●～○●▽にまとめられる。type Oからかなりの変化を経ていると思われるが、とくに助詞付き文ではII III / I IV Vの区別がはっきりしている。更に東の北葛飾郡庄和町西宝珠花 (大9・男5678.82) には、より無アクセントに近いタイプがある (type ②)。

II III ●● or ○●～○●▽

I IV V ●● or ○●～○●▽ ただし類別の混乱が多い

また、ここから北に位置する北葛飾郡鷲宮町鷲宮 (昭6・男5678.46) にはtype Bから体系の単純化が進み、I IV V / II IIIになったと思われるタイプがある (type ③)。

II III ●○～●○▽

I IV V ●○～○●▽

さらに、北葛飾郡松伏町松伏 (昭15・女5689.42下) に、type Aのような、II III類助詞付き文節の音調が○●▽のタイプから変化したと思われるものがある (type ④)。

II III ●○～○●▽

I IV V ●○～○●▽ or ○●▽

I IV V類の2拍目から助詞にかけての下降は非常に僅かで、II III類とほとんど変わりが

ない。合流して、無アクセント化する寸前なのだと思う。

以上の type ①～④は、かなり単純化が進んだ段階までⅡⅢ類が基となったタイプの音調 (type O の●○～●◎▽) に近い形を保っている。この性質の違いのせいで、type A～C とは別の合流の方向をとったものと思われる。

5.6 無アクセントタイプ《type Z》

これより東の千葉県閑宿町 (5679.41)、茨城県総和町 (5679.01)・古河市 (5678.18)、北の北埼玉郡北川辺町 (5668.85と87) 等では完全な無アクセントとなる。音調は前述 (1節) のようにⅠ～Ⅴ類全て●○～○●▽ (地点によっては○●▽) である。

6. 埼玉県東南非都市部地域に残存する埼玉式アクセント《type P～Q》

5.1～5.3節で見たように、埼玉式の中心地であった蓮田市・白岡町に、現在残っているのは典型的な type O からかなり変化を起こしているものであった。それらに比べて、むしろ type O に近いのではないかと思われるタイプが、県東南部地域で得られた。

6.1 type O に近いと思われるもの《type P》: 越谷市増森/昭11・女 (5689.53)

Ⅰ類	カマ (釜)	アメ (船)	ハチ (蜂)	ミズ (水)
	カマガ	アメガ	ハチガ	ミズガ
Ⅱ類	ハタ (旗)	ムネ (胸)	ハシ (橋)	ナツ (夏)
	ハタガ	ムネガ	ハシガ	ナツガ
Ⅲ類	ハナ (花)	コメ (米)	アシ (足)	クツ (靴)
	ハナガ	コメガ	アシガ	クツガ
Ⅳ類	カーマ (鎌)	フーネ (船)	ハアシ (箸)	マーツ (松)
	カーマガ	フネガ	ハシガ	マツガ
Ⅴ類	アーメ (雨)	アーセ (汗)	オオビ (帯)	ハル (春)
	アメガ	アセガ	オビガ	ハルガ

※「カー」や「フー」は2モーラ分の長さ、「ハア、オオ」は、1.5モーラ分の長さを示す。

Ⅰ	●○～●◎▽
ⅡⅢ	●○～●○▽
ⅣⅤ	●● or ○●～●◎▽ or ○●▽

この地は古利根川を境にして松伏町と接する旧増林村域内で、「近い将来一型化しきうな」越谷町 (type C に類似) ではなく、蓮田町のアクセントに「そっくり」で、「典型的な埼玉アクセント」とされている吉川町 (松伏町のすぐ南) や松伏町のものに比すべきだと思われる (金田一春彦1948, p.54～56参照)。本稿の調査では松伏町松伏 (前掲 type ④)、吉川町ともに曖昧化が進んでいた。それに対して、金田一博士の調査者よりも10年以上若いこの話者に典型的な埼玉式が見られることは注目すべきだと思う。

他地域ではⅣⅤ類は○●～○●▽で比較的安定していたが (1節参照)、ここでは一拍目が高くなる場合がある。また、ⅣⅤ類に限って (特に語単独の場合) 1拍目が時に長音化する。松伏町松伏 (前掲 type ④) にもより少ないが観察された。意味や語音によって決まてはいないようであり、同じ語が長音化しないこともある。自然会話では○●

(▽)が多く、比較発音調査でも全て○●(6語中4語=鎌, 雨, 箸, 蜘蛛が1拍目長音化)で現れた。これまでにこの現象に関する報告はないようである。この現象の確認のため旧増林村地区においてアクセントのみの小調査を行った¹⁴⁾。結果のみを簡単に述べる。

①無アクセントの話者が多い(4/7人), ②型の区別があると思われる話者にも曖昧化が見られる。また, ③その場合IVV類は○●(▽) or ●●~○◎(▽)で一拍目が高くなる傾向がやはり見られた。④「釜 vs 鎌」「飴 vs 雨」等の比較発音を求めた場合に限り最若年の2名にのみ長音化がみられた(もちろん「鎌」「雨」に)。この長音化は, 石川県羽咋郡などに見られる類似の現象について言われているのと同じく, アクセント変化に関わっている可能性が考えられる(岩井隆盛 1961, p.96)。埼玉式の話者にアクセントに関して内省を求めると「高低」ではなく「強い」とか「伸びる」という表現が現れることが多かったことも考えると, 音高の対立が失われる代わりに prosody のレベルでの対立を補償するものであるかも知れない。今後さらに詳しく調べてみたい¹⁵⁾。

6.2 type P に近いもの《type Q》: 草加市旭町/大15・男(5699.02)

- I ●○~●○▽(釜, 水) or ○●▽(飴, 蜂)
II III ●○~●○▽ or ●○▽(夏, 米)
 /○●~○●▽(靴: 1拍目無声化のため)
IV V ○● or ●●(船)~○●▽ or ●●▽(船)

type P に比べてI類の音調が変化をはじめており, ゆれている。しかし東京に程近いにも関わらず, かなり type O に近い体系である。この地点は旧地名を九左衛門新田といい, 純農村地域であった。越谷と草加の中間に位置し, 開発が進んだのはそれほど早いことではない。6.1節の越谷市増森や, ここのような条件があれば, 南部地域でも典型的な埼玉式に近いものは残存するのであろう。昭和12年における吉川町等はそういう状況にあったものと思われる。

7. ま と め

このような狭い地域の中で, その誕生から成立そして崩壊までが辿れることからすると, 埼玉特殊アクセントの成立はそれほど古い出来事ではなく, 完成するそばから崩壊してゆくようなものであったろう。本稿で見たような類別の混乱をや音調のゆれ含んだもの(例えばO', A'の類)こそが, むしろ「典型的な埼玉式」の本当の姿ではなかったかと疑われる¹⁶⁾。現在は共通語化の勢力が強いため, このあとの世代における曖昧化の進行は止まっているようだが, 埼玉特殊アクセントは本来曖昧化をさらに続けて無アクセントへと行き着くはずのものであったと思われる。

また, 県東南の非都市部にも, 現在の東北部よりも古いとみられる体系が点在する。昭和初期の最初の報告以前の埼玉県東部には典型的な埼玉式に近いものがより広く分布していたことを想像させる。

[注]

(1) 埼玉県東部地域を中心として, 隣接する無アクセント地域・東京式アクセント地域を含む83地点

(うち茨城県3地点・千葉県4地点)の生え抜きの高年層話者87名に、音韻・アクセントの面接調査を行った。調査期間1990年10月～1993年5月。男性71名・女性16名、5名が50歳代、1899～1940年生まれ、平均生年1917.8年。調査項目：名詞：1拍3語・2拍27語・3拍14語・4拍8語/動詞：2拍4語・3拍5語/形容詞10語。

- (2) ①については、佐藤亮一(1970)、秋永一枝・他(1971)、大野真男(1984)等、②については、木野田れい子(1972)、都染直也(1983)、柴田武(1983)、大橋勝男(1984)、井上史雄(1984)等。
- (3) ③については、金田一春彦(1948)、井上史雄(1988)等、④については、柴田武(1988)山口幸洋(1991)、等。
- (4) 木野田れい子(1972)の30歳代以下、馬瀬良雄(1981)、篠木れい子(1984)、加藤正信・他(1984)。篠木れい子・佐藤和之(1991)等。
- (5) 大橋勝男(1984. p.106)図4を参照されたい。これに「蜘蛛(V類)vs「雲(Ⅲ類)」の比較および、同音語ではない例として「汗(V類)vs「胸(Ⅱ類)」の比較を加えた。
- (6) 加藤正信(1975)や、小沼民江・真田信治(1978)でも、2拍名詞IVV類の●○～○●▽の維持率を埼玉式か否かの判断基準にしている。また、より近年の調査である都染直也(1983)、井上史雄(1984)でもIVV類に同様の傾向が表れている。
- (7) 佐藤亮一(1970, p.186)に既にこのことの指摘がある。
- (8) 早野慎吾(1990)の、栃木県芳賀郡アクセントにおける「安定的傾向型」、井上史雄(1984, p.127, p.135)の栃木・福島県の無アクセント地域における「自然な高低パターン」が同じく●○～○●▽型である。本稿のものもこれと同じタイプであろう。
- (9) 加藤正信・他(1984)が、山形県の無アクセント・有アクセント接触地域について類似の現象、すなわち、老・中・(若)年層が曖昧化し、(若)・少年層が東京アクセント化するという「いわば二極化の動き(p.43)」を指摘している。
- (10) 井上史雄(1984)における多変量解析の結果でも、埼玉式が共通語アクセントだけでなく、一型アクセントとも差があることが明確に示されている。
- (11) 【地図1】は、例えば春日部でCより西にDが分布する(Dの方が年齢が11歳若いことによると思われる)等、必ずしも変化を直線的に地理分布上に示していない。今後調査を補充し、アクセントタイプのグロットグラムを作成するなどして年齢差を考慮に入れてゆきたい。
- (12) 本稿の調査でも、IVV類の●○▽型化の傾向は、南部の鳩ヶ谷市坂下(大13・男5698.09)、川口市新堀(大13・男5699.10)など南部地域にも見られたが、この地域の場合Ⅰ～Ⅲ類が東京式ではなく、例えば川口では●●～●●▽が多いので、全類合流(無アクセント)に近づいているといえる。南部地域のIVV類の●○▽型は別に扱う方がよいのではないだろうか。なお、注④参照。
- (13) 木野田れい子(1972, p.61)の久喜町老年層でも同様のゆれが見られる。
- (14) 1993.4.27実施, 1, 2拍名詞のみ、生え抜き話者7名(男性1名, 女性6名; 48～80歳)
- (15) 注④で述べた南部地域のIVV類の●○▽型は、このような現象を契機として大宮、上尾などとは別に発生した可能性が考えられる。このような理由で、本稿ではアクセントタイプの考察を東北部地域中心に行い、東南部については保留した。
- (16) 金田一春彦(1948)は、むしろ蓮田町アクセントにも「ゆれ」が見られることを報告しており、東京式と鏡像関係にある整った安定な体系は、高度な音韻論的解釈によってしか得られない、抽象的なものなのではないかと思っている。

《参考文献》

- 秋永一枝・佐藤亮一・金井英雄(1971)「利根川上・中流域のアクセント」『利根川—自然・文化・社会—』弘文堂
- 岩井隆盛(1961)「方言の実態と共通語化の問題点1 富山・石川」『方言学講座』3 東京堂
- 井上史雄(1984)「アクセントの生成と知覚—関東における地域差と年齢差—」『現代方言学の課

題 第2巻』明治書院

- (1988) 「荒川流域の方言」『荒川 人文Ⅲ—荒川総合調査報告書4—』埼玉県
上野善道(1977) 「日本語のアクセント」『岩波講座日本語5 音韻』岩波書店
(1984) 「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第2巻』三省堂
大野真男(1984) 「埼玉県東北部における特殊アクセントの諸相—その曖昧化の過程—」『現代方言学
の課題 第2巻』明治書院
大橋勝男(1984) 「埼玉県東北部アクセントについての方言地理学的研究—特に二音節同音異義名詞
アクセント事象の分布に注目して—」『現代方言学の課題 第2巻』明治書院
小沼民江・真田信治(1978) 「大都市東京の北辺における方言分布の実態」日本方言研究会第26回研
究発表会原稿集
加藤正信(1975) 「市川の方言」『市川市史 第4巻』
加藤正信・他(1984) 「曖昧音調地域における世代別アクセント推移の研究—山形県の有アクセント
・無アクセント接触地帯の音相分析—」『応用情報学研究年報』10—1
木野田れい子(1972) 「埼玉県南埼玉郡久喜町のアクセント—曖昧アクセントから東京アクセントへ
—」『都大論究』10
金田一春彦(1948) 『埼玉県下に分布する特殊アクセントの諸相』私家版
佐藤亮一(1970) 「アクセント調査法についての一実験」『国語学研究』10；『論集日本語研究2 ア
クセント』有精堂(1980)に再録、頁数はこれによる。
篠木れい子(1984) 「群馬県館林市方言のアクセント(一) —曖昧アクセントの研究—」『群馬県立女
子大学紀要』4
篠木れい子・佐藤和之(1992) 「無型アクセントの音相実態と共通語化(2) —栃木県氏家町方言アクセ
ントを例として—」加藤正信編『東日本の音声—論文編(2)』「日本語音声」東日
本班研究成果刊行書
柴田 武(1983) 「埼玉県南部・東京都北部地域の方言分布(2) —アクセント—」『埼玉大学紀要』
第19巻
(1988) 「方言地理学の課題」『方言論』平凡社
都染直也(1983) 「合成音声によるアクセント研究—埼玉県東南部付近におけるアクセントの発話型
と知覚型の比較—」『待兼山論叢』17
早野慎吾(1990) 「栃木県芳賀郡方言のアクセント」『名古屋・方言研究会会報』7
平山輝男(1973) 「アクセント体系の新古とその母体系の判定について」『人文学報』96
馬瀬良雄(1981) 「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125
山口幸洋(1992) 「一型アクセント論のために—大井川上流方言を中心に—」加藤正信編『東日本の
音声—論文編(1)』「日本語音声」東日本班研究成果刊行書

本稿は1992年10月23日、日本方言研究会第55回研究発表会での口頭発表に加筆・修正を
加えたものです。発表後、諸先生方に貴重なご教示を賜りました。また、調査時には多く
の方に大変お世話になりました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

〔付記〕 本稿提出後、荻野綱男氏「流域の言語」『中川水系Ⅲ 人文』(1993；埼玉県)
を知った。県東南部の老年層に特殊アクセントが残っていることを報告されているが、本
稿のタイプに当てはめると、鷺宮にO¹、栗橋・鷺宮・幸手・杉戸にB，幸手にB¹，杉戸
にCとなり、概ね似た結果が得られている一方、白岡・蓮田は1名がO→Bの移行中(?)
である他は型の区別がはっきりしない等、一部異なる結果も見られる。